木次町東日登 大歳遺跡出土の兜

昭和47年（1972）の春、雲南市木次町大字東日登で兜（かぶと）・鉄鍋・和鏡などが見つかりました。これらは地権者宅で保管されていましたが、昨年、雲南市に寄贈して頂きました。

地権者からの聞き取りによれば、兜・鉄鍋・和鏡などが出土地点には、もとは大歳（おおとし）山と呼ばれる山がありました。開墾によって畑となりましたが、榊の老木があり、荒神さんとして祀られていたそうです。この切株の下で鏡と土師器、少し離れたところからは兜をはじめ鉄鍋・刀・銅銭が見つかりました。兜の上には鉄鍋が伏せた状態でのせられ、その周囲に土師器の皿がやはり伏せてあったと伝わっています。

兜は、鉄地に漆が塗られたものです。大きさは現状で長径25㎝・短径22㎝・高さ12㎝、16枚の鉄板を重ね合わせています。鉄板をつなぎ合わせる部分には、端部を折り曲げた筋（すじ）が16本あり、鋲（びょう）で留められます。鉢の下には腰巻板が付けられ、背面側は断面L字形に折り曲げ水平になっています。この部分には、首を守るための錏（しころ）という部材が鉢付鋲で取り付けられます。鉢付鋲は、円形の笠をもつ銅鋲で、X線写真によれば脚部は割ピン状になっています。銅鋲の笠と腰巻板の間には隙間がありますので、この間に錏が取り付けられたことがわかります。兜の正面には眉庇（まびさし）が付きます。眉庇には、兜の装飾である前立（まえたて）を取り付けるための角元（つのもと）が2ヶ所に鋲留めされていました。

大歳遺跡の兜は、漆塗りで、前立・錏の付いた立派なものです。時期は、15世紀末～16世紀前半、戦国時代のものとみられます。兜は、発見時の状況から、鉄鍋や和鏡などとともに、何らかの祭祀で使われ、埋められたようです。兜は、祭祀に領主層、武士が関わったことをうかがわせるものといえます。

リンク：島根県遺跡データベース

大歳遺跡の出土遺物

右上が兜、ほかに鉄鍋・鉄刀・和鏡・銅銭・土師器皿などがある。